

## 大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：奥山 滋樹（臨床心理相研究コース）

<b>■ 研究題目</b>
親の介護を担うヤングケアラーにおける、親子関係の役割逆転が及ぼす影響の検討
<b>■ 研究代表者・分担者 氏名</b>
奥山滋樹（臨床心理研究コース）（代表者）
<b>■ 研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）</b>
<b>研究目的</b> <p>親の疾病や障害などの理由から介護、ケアを担う立場にある青年・子どもをヤングケアラーという。本研究では家庭内で親の介護・ケアを担うヤングケアラーを対象とし、親子関係での情緒面における役割逆転（以下、「役割逆転」と記す）がヤングケアラー当事者の生活上の適応に及ぼす影響を明らかにすることが目的であった。「役割逆転」とは、①親から子に情緒的サポートが与えられない、②子どもから親に対する情緒的サポートが与えられる、③親は子どもに過剰な期待を課す、④親は子どもに対しての屈折的な甘えを呈する、という特徴を含む現象であり、この「役割逆転」が親子間で高まることで子の精神的健康が阻害されることが示唆されている（山田・平石・渡邊, 2015）。</p> <p>子どもが親の介護・ケアを担うヤングケアラーにおいては実際的な行為上での役割の逆転が生じることは普遍的にみられるものであると考えられる。しかしながら、情緒面での「役割逆転」の有無やかたちはヤングケアラーであったとしても一様ではなく、その違いがヤングケアラーである子の負担や生活適応に影響を及ぼすことが予想される。すなわち、情緒面での「役割逆転」の観点から検討を行うことで、ヤングケアラーにとって負担の生じないかたちでの介護・ケアの在り方を探索することが可能になると考えられ、親子の関係性に着目した支援に対する示唆を得ることが期待される。</p> <p>なお、親が精神疾患である場合には養育態度に影響が及ぶことが考えられ、その影響が「役割逆転」のあり方にも及ぶことが予想される。そのため、本研究においては精神疾患の親をケアする者と、身体疾患や身体障害などの他の事由によって親のケアをしている者として分類を行い、それぞれで「役割逆転」が及ぼす影響の違いについても併せて検討を行う。</p>
<b>方法</b>

2018年1月<sup>1</sup>および2019年8月に親の介護・ケアを担っているヤングケアラーを対象に、インターネット調査を行った。調査対象者の条件としては、Okuyama (2018) を参考とし、「自身が25歳時以前に身体的および精神的な疾病・障がい、認知症などを理由として介護・ケアが必要な状態にある両親に対して、介護・ケアを提供していた経験を1年以上有する者」を要件とした。

なお、いずれの調査も東北大学大学院教育学研究科の倫理審査委員会への申請・承認を得て、実施された。

※1 2018年1月の調査は本プロジェクトの予算外で行ったものだが、本研究の調査項目と同種の項目を含むものであったため、分析に含めて用いた。

使用項目、尺度は以下の通りである。

### 1 フェイスシート・家庭内の介護・ケアに関する基礎情報

調査対象者の属性、ならびに家庭内での介護・ケア行為に関する基礎的なデータを得るために、以下の項目群を尋ねた。調査時点の年齢、性別、介護・ケアしている相手の続柄（父母のいずれ、両親）、介護・ケアが必要な事由（身体疾患、身体障害、精神疾患）、1日当たりの介護・ケアに費やしている時間（1時間未満、3時間未満、5時間未満、7時間未満、10時間未満、10時間以上）、1週間当たりで介護・ケアに費やす日数（週に1日、3日未満、5日未満、ほぼ毎日）。

### 2 ヤングケアラー心理尺度改訂版（奥山，2018）

Okuyama (2018) が Cox と Pakenham (2014) の Young Carers of Parents Inventory Revised (以下、YCOPI-R) をもとに開発した尺度を、奥山 (2018) にて改訂したものである。ヤングケアラーの負担や適応を示す指標として用いた。Part A と B の二部構成。Part A は生活上の負担を反映し、「役割負担」、「過剰なケア役割」、「拘束感情」、「安否の心配」、「自覚的成熟」、「家事への貢献」の6因子構造であり、全26項目となる。Part B はケアに伴う好悪の感情を反映する、「逃避感情」、「積極的関与」、「罪悪感」の3因子構造であり、全18項目であった。「全くあてはまらない」から「とてもあてはまる」までの5件法による回答を求めた。

### 3 親子関係の役割逆転尺度（以下、役割逆転尺度と記す）（山田・平石・渡邊，2015）

山田ら (2015) による作成で、親子間で生じる非機能的な「役割逆転」の程度を測定する尺度である。尺度全体は4因子に分かれ、「親の過期待」、「親の屈折的甘え」、「親から子へのサポート放棄」、「子どもによる情緒的サポート」からなる。それぞれの因子ごとに4項目が設けられ、全部で16項目である。「まったくあてはまらない」～「とてもよくあてはまる」までの6件法にて回答を求めた。

## 結果

### 1. 調査対象者の属性、ならびに介護・ケアに関する基礎情報

本研究では調査対象に合致し、かつ回答に不備のみられなかった、122名を後の分析対

象とした。性別は男性 26 名、女性が 96 名であり、女性の方が有意に多かった ( $\chi^2=40.16$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ )。調査対象者の平均年齢は 22.08 歳 ( $\pm 2.41$ ) であり、10 代の者は 28 名 (23%) に留まった。ケアに関与していた平均年数は 3.84 年 ( $\pm 3.89$ ) であり、3 年以上に及ぶ者は 62 名であり、全体の半数強に及んだ。介護・ケアを提供している相手の続柄では父親のみが 50 名、母親のみが 59 名であり、父母の両方のケアを担っている者は 13 名となった。介護・ケアを提供している事由としては身体疾患が 51 名、身体障害が 48 名、精神疾患を事由として介護・ケアを提供している者は 48 名であった (一人で複数の障害や疾患がある場合もみられたため、重複回答を含む)。介護・ケアの関与時間に関しては、1 時間未満と回答した者は 36 名であり、全体の 7 割近くの者が 1 日に 3 時間以上を介護・ケアに費やしていた。また、1 週間当たりの日数に関しては、ほぼ毎日と回答した者が 58 名であり、半数近くになった。

## 2. 親子関係の役割逆転の分類と類型間の違いとヤングケアラーの適応の関連の検討

まず、親の介護・ケアを担うヤングケアラーにおける「役割逆転」の仕方の分類を行うために、役割逆転尺度の各下位尺度得点を用いて、Ward 法によるクラスタ分析を行った。その結果、3 つのクラスタが得られた (Figure 1)。第 1 クラスタは 38 名、第 2 クラスタは 66 名、第 3 クラスタは 22 名であり、3 つのクラスタ間には、人数比率に有意な偏りが認められた ( $\chi^2=19.33$ ,  $df=2$ ,  $p<.001$ )。それぞれの特徴から、第 1 クラスタは「道具的ケア関係」群、第 2 クラスタは「相互的サポート関係」群、第 3 クラスタは「役割逆転」群とした。各クラスタでは性別でのみ有意な偏りがみられ、「道具的ケア関係」群 (男性=15 名, 女性=23 名) と「役割逆転」群 (男性=1 名, 女性=21 名) との間で男女比の偏りがみられた ( $\chi^2=12.15$ ,  $df=2$ ,  $p<.01$ )。「相互的サポート関係」群と「役割逆転」群との間での「子どもによる情緒的サポート」得点を除き、各クラスタ間で「役割逆転尺度」の全ての下位尺度得点に有意差が示された。

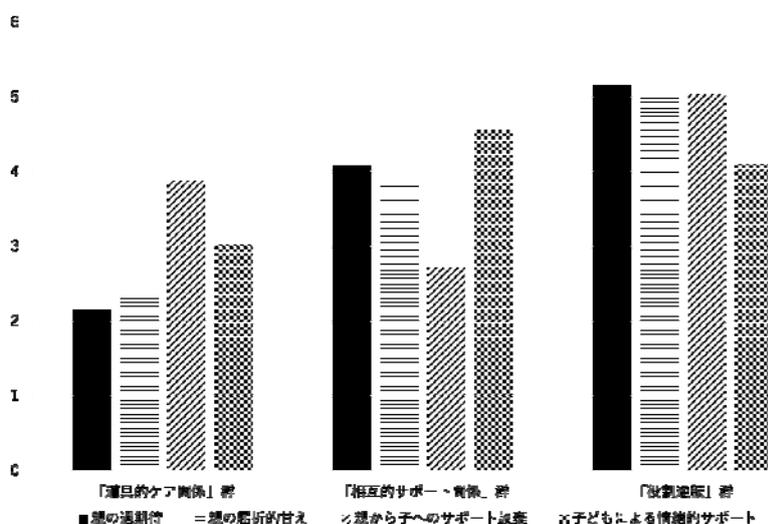


Figure 1 各クラスタにおける役割逆転尺度得点

続いて、3つの役割逆転のスタイルの違いによるヤングケアラー心理尺度改訂版の各下位尺度得点が異なるかどうかを検討するために、一元配置分散分析を行った (Figure 2)。Tukey の HSD 法による多重比較を行ったところ、「過剰なケア役割」、「不自由さ」、「家事への貢献」、「罪悪感」の各得点においては「役割逆転」群 = 「相互的サポート関係」群 > 「道具的ケア関係」群、「安否の心配」得点では「相互的サポート関係」群 > 「道具的ケア関係」群 = 「役割逆転」群、「逃避感情」得点で「役割逆転」群 > 「相互的サポート関係」群 > 「道具的ケア関係」群、「積極的関与」得点で「相互的サポート関係」群 > 「役割逆転」群 = 「道具的ケア関係」群という結果が示された。「実務的負担」得点については、多重比較による有意差は示されなかった。

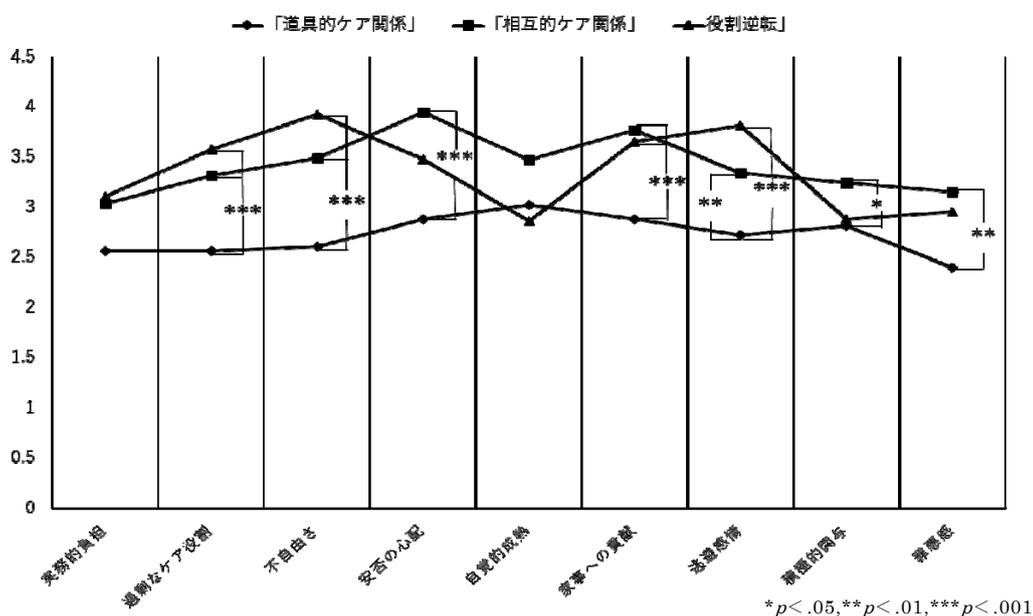


Figure 2 「役割逆転」のタイプごとにおけるヤングケアラー心理尺度改訂版の下位尺度得点

### 3. 親の精神疾患の有無の違いにおける役割逆転がヤングケアラーの適応に及ぼす影響の検討

親の精神疾患による介護・ケアの有無の違いによる「役割逆転」の影響を明らかにするために、調査対象となったヤングケアラーを「身体疾患・障害」群、「精神疾患」群の2つのグループに分類を行った。調査対象者中には親が身体疾患および身体障害に加えて、精神疾患にも併存をしていると回答していた者が11名いた。これらの重複回答に関しては親の精神疾患による症状が役割逆転に関与することが考えられたため、「精神疾患」群に分類を行った。「身体疾患・障害」群が74名、「精神疾患」群が48名であり、人数比率に有意な偏りがみられた ( $\chi^2=5.54, df=1, p<.05$ )。

次に「身体疾患・障害」群と「精神疾患」群による親子関係の役割逆転尺度の下位尺度得点が異なるかどうかを検討するために、一元配置分散分析を行った。結果は Figure 3 に示す。

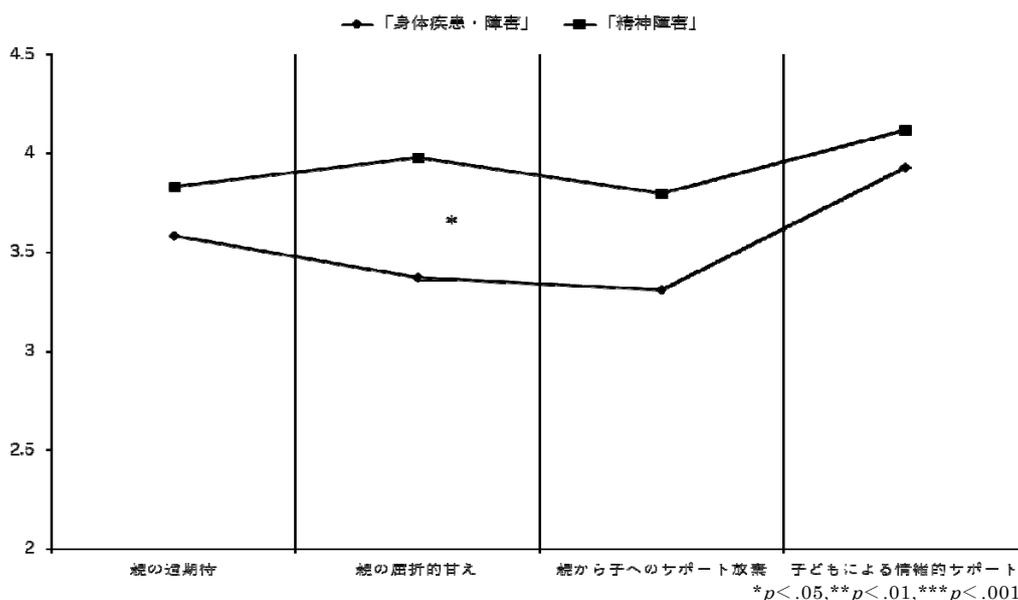


Figure 3 親の精神疾患の有無タイプごとにおける「役割逆転尺度」の解釈度得点

更に「身体疾患・障害」群および「精神疾患」群での役割逆転がヤングケアラーの適応に及ぼす影響の違いを検討するために、それぞれの群ごとに親子関係の役割逆転尺度の各下位尺度得点を説明変数、ヤングケアラー心理尺度改訂版の各下位尺度得点を目的変数とした重回帰分析を行った。結果は Table 1 と Table 2 に示す。

Table 1 親に精神疾患がない場合の重回帰分析結果

従属変数	独立変数						調整済み $R^2$
	役割逆転尺度						
	「親の過期待」	「親の屈折的甘え」	「親から子へのサポート放棄」	「子どもによる情緒的サポート」			
ヤングケアラー心理尺度改訂版 Part A	「実務的負担」	-	.42 ***	-	-	-	.18
	「過剰なケア役割」	.35 ***	-	-	.29 *	.29	.29
	「不自由さ」	.32 *	-	-	.25 *	.23	.23
	「安否の心配」	.32 **	-	-.29 ***	.27	.27	.27
	「自覚的成熟」	-	-	-.36 **	.12	.12	.12
「家事への貢献」	-	-	-	.45 ***	.19	.19	
ヤングケアラー心理尺度改訂版 Part B	「逃避感情」	.31 **	-	-	.40 **	.37	.37
	「積極的関与」	-	-	-.33 **	.28 *	.27	.27
	「罪悪感」	.24 *	-	-	.36 **	.26	.26

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

Table 2 親に精神疾患がある場合の重回帰分析結果

従属変数	独立変数						調整済み $R^2$
	役割逆転尺度						
	「親の過期待」	「親の屈折的甘え」	「親から子へのサポート放棄」	「子どもによる情緒的サポート」			
ヤングケアラー心理尺度改訂版 Part A	「実務的負担」	.48 **	-	-	-	.23	.23
	「過剰なケア役割」	.59 **	-	-	-	.34	.34
	「不自由さ」	.54 ***	-	-	-	.27	.27
	「安否の心配」	-	-	-	.50 ***	.23	.23
	「自覚的成熟」	-	-	-	.29 *	.07	.07
「家事への貢献」	-	-	-	.32 *	.08	.08	
ヤングケアラー心理尺度改訂版 Part B	「逃避感情」	.55 ***	-	-	-	.28	.28
	「積極的関与」	-	-	-	-	-	-
	「罪悪感」	.45 **	-	-	-	.18	.18

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

## 考察

### 1. 役割逆転タイプの分類とヤングケアラーとしての適応との関連

親子関係の役割逆転尺度得点を用いてクラスタ分析を行った結果、本研究の調査対象者は3つのタイプに分かれた。各クラスタの親子関係の役割逆転尺度の下位尺度得点の平均値の値から「道具的ケア関係」群、「相互的サポート関係」群、「役割逆転」群と命名した。

各クラスタを独立変数、ヤングケアラー心理尺度改訂版の下位尺度得点を従属変数とした分散分析を行った結果、「過剰なケア役割」、「不自由さ」、「家事への貢献」、「罪悪感」の各得点においては「役割逆転」群と「相互的サポート関係」群が「道具的ケア関係」群よりも有意に高い値が示された。このことから、「役割逆転」群と「相互的サポート関係」群に属する者においては、親への介護・ケアに生活の多くを割き、自身が親を支えるケアラーであるという役割意識が強い傾向にあることが示唆された。

一方、「安否の心配」、「積極的関与」得点では「相互的サポート関係」群>「役割逆転」群、「逃避感情」得点では「役割逆転」群>「相互的サポート関係」群であり、二つの群に違いがみられた。このうち、「安否の心配」や「積極的関与」は、それぞれに介護・ケアの受け手である親に対する強い関心や自身のケアラーとしての役割への肯定的な自己認識を反映するものである一方、「逃避感情」は介護・ケアによる重い負担からの逃避を求める感情を反映するものであると考えられる。そのため、「相互的サポート関係」群においては介護・ケアが必要な状態に置かれている親に対する強い関心に加えて、ヤングケアラーとしての自己の役割を肯定的に捉え、その役割に対しての自己効力感が高い傾向にあることが考えられる。一方で、「役割逆転」群においては親に対する関心はそれほど高くなく、自己に課された役割を否定的なものと捉え、自己効力感に乏しい状態にあると認識する傾向にあることが考えられる。この二つの群における大きな違いとしては、親子関係の役割逆転尺度の「親から子へのサポート放棄」得点の違いがあげられる。山田ら(2015)は役割逆転という概念について「一義的には親が子どもに情緒的サポートを与えない現象であると捉えることができる」とも述べており、親から子に対しての情緒的なサポート供給の程度がヤングケアラーの負担に関与することが考えられる。

### 2. 親の精神疾患の罹患の有無による役割逆転がヤングケアラーの適応に及ぼす影響の違い

親の精神疾患の罹患の有無で分類を行い、役割逆転尺度の下位尺度得点を従属変数とした分散分析を行った結果、「親の屈折的甘え」得点でのみ有意差が示され、親が精神疾患であった場合にはそうでない場合と比較して、子が親の期待に沿わない行動を取ったときに「すねる」「ふてくされる」といったかたちのコミュニケーションが現れる傾向が強くなることが考えられた。

親子関係の役割逆転尺度の下位尺度得点を説明変数、ヤングケアラー心理尺度改訂版の

下位尺度得点を目的変数とした重回帰分析の結果からは、「身体疾患・障害」群と「精神障害」群の両者で、それぞれ「親の過期待」から複数の有意な正の影響関係が示され、親からの期待を高く認知された場合には親の精神疾患の罹患の有無を問わずに負担が高まることが考えられた。

また、「親から子へのサポート放棄」得点は「精神疾患」群では従属変数に影響を及ぼさず、「身体疾患・障害」群では介護・ケアの受け手である親に対する関心のなさや消極的関わりを高めるような結果が示された。加えて、「子どもによる情緒的サポート」得点では、「身体疾患・障害」群においては負担を高めるような結果となり、「精神疾患」群では親や家族に対する配慮や成熟を高めるような結果となった。こうした結果には、両群の親子間での情緒的なサポート供給に関する期待が関係していることが考えられた。親が精神疾患である場合にはヤングケアラーの側で情緒的サポートの供給に対する期待はそもそも乏しく、子どもの側から親に情緒的なサポートを与えることも当然のこととして受け止めていることが予想される。しかしながら、親に精神疾患がない場合では通常の家環境と同様に親から子への情緒的なサポートが供給されることへの期待が生じ、子どもから親へのサポートの供給も不合理なものとして認識されていることが考えられる。そのため、そのような親に向けた期待の裏切りや自身が行っている情緒的なサポートに対する評価が、ヤングケアラーの側で負担を高めたり、親との関りの中で回避的な関わりを強めたりしていることが考えられた。

### 3. 支援に向けての示唆と、本研究の課題・限界

本研究では親の介護・ケアを担うヤングケアラーを対象として、情緒面での「役割逆転」とヤングケアラーの負担と生活適応との関連を検討した。また、併せて、親の精神疾患の有無による「役割逆転」の傾向と、その「役割逆転」の影響の仕方の違いについても検討を行った。その結果、「役割逆転」の度合いが高い場合には、ヤングケアラーの負担が高まり、生活面での適応にも否定的な影響が及ぶことが示された。また、親の精神疾患の有無による検討では、親に精神疾患がある場合には「親の屈折的甘え」が高くなる傾向にあるものの、ヤングケアラーの立場にある子の負担には強い影響は示されなかった。

こうした結果からは、①親が子どもに介護・ケアを頼らざるを得ない場合であっても、親から子に対しての情緒的なサポートの供給が保たれ、親側の過度な期待や甘えの抑制がなされている場合にはヤングケアラーである子どもの適応が保護される可能性、②親に精神疾患がない場合には親子間での世代間境界にもとづいた情緒的なサポートが負担軽減に結び付く可能性、という二点が考えられた。

これらから親の介護・ケアを担うヤングケアラーの支援を考える際には、親から子に日常的に与えられる情緒的サポートに着目することが重要であることが示唆された。特に親に精神疾患への罹患がみられない場合には、親から子への情緒的なサポート供給を促進するような働きかけが有用となることが考えられる。

本研究の課題や限界としては、主に3点挙げられる。1点目は調査対象者の年齢層の高さ、すなわち、中高生年代のサンプルの少なさである。2点目は調査対象者の人数の少なさがある。3点目は親子関係以外からの情緒的サポートの影響が未検討な点である。特に3点目の課題については、仮に介護・ケアを受けている親が情緒的なサポートをヤングケアラーに与えることが困難である場合に、他の家族成員によるサポートが穴埋め的に機能するの否かを検討することは、支援の幅を広げるうえで重要となることが考えられる。

#### 引用文献

1. Cox, K. & Pakenham, K. (2014) . Confirmatory factor analysis and invariance testing of the young carer of parents inventory (YCOPI) . *Rehabilitation Psychology*, 59, 439-452.
2. Okuyama, S. (2018) . Development of Young carer psychological scale Japanese version: Reliability and validity examination: . *International Journal of Brief Therapy and Family Science*, 8 (1) , 1-22.
3. 奥山滋樹 (2018) . ヤングケアラー心理尺度改訂版の開発ー項目表現の変更とカットオフポイントの検討ー, *東北大学大学院教育学研究科年報*, 67 (1) , 257-266.
4. 山田智貴・平石賢二・渡邊賢二 (2015) . 大学生における親子関係の役割逆転に関する研究: 擬似成熟との関連から, *家族心理学研究*, 29 (1) , 1-18.